

東日本大震災における子ども・若者参画による長期的支援の検討

東北福祉大学 清水 冬樹 (6541)

当事者参加による調査研究 肯定できる経験 地域福祉

1. 研究の背景と目的

(1) 研究の背景

東日本大震災で大きな被害を受けた東北地方、特に津波被害を受けた沿岸部では、震災の影響が子ども・子育て家庭の中で現れてはじめていくという。柴田ら(2019)は、震災後7年が経過した時期に宮城県内の保育所を利用する子どもの心身状態に関する調査を行ったところ、子どもたちに衝動性・多動性等の様相が見られること、そうした子どもたちを保育する保育士たちが疲弊してしまっていることを報告している。また、足立(2019)は、特に津波被害を受けた地域の若い親たちの育児に対する困難度と、小学校高学年の子どもたちの攻撃性が高くなっていることを指摘する。被災時に中学生や高校生だった子どもたちが親になり始めたことや、就学前に避難所で過ごす時間が長かった子どもたちの発達との関連を仮説的に検討しつつ、東日本大震災における長期的な支援の必要性を提起している。

震災に関わらず、中学生、高校生世代子どもたちについて、学校が生活の大半を占める場であることから、児童福祉の対象として今日まで捉えられてこなかったこと(武田2015)や、この世代への支援は家庭教育と社会教育が担ってきたという指摘(森田2014)がある。根本的に考えると、実践であれ研究であれ、この世代の声に触れる仕組みをそもそも児童福祉は持っていないため、この世代の子どもたちのニーズに触れることができなかつたとも考えられる。ほとんど気になげられることがなかつたこの時期の子どもたちについて、沿岸部の自治体職員である門間(2013)は、震災から比較的早い時期から「自動販売機を壊そうとする」「深夜の徘徊」など、行き場がなかつた中高生たちの姿がまちなかで複数見られたことを報告している。

しかし、実際には被災地内外からのたくさんのボランティアがやってきて、中学生や高校生世代を支える取り組みが展開されていった。具体的には学習支援の場や遊び場づくりなどであった。活動主体は法人格を持たない市民団体やNPO等法人格を持つ団体などであった。

市民社会による支援の意義について、筆者らはいくつかの論考ですでに明らかにしてき。その意義について示すと、以下のことが言える。

- 将来に対する希望や自己肯定感を高めることに、学習支援の場が貢献しているといくこと(東洋大学福祉社会開発研究センター2015)
- 学習支援の場の特徴として、学習支援の場にいる支援者から必要とされたり、役割を与えられたりすること(清水2015a)
- 支援者と子どもたちが一緒に今のことや将来のことを相談したり考えたりしながら、次のステップへ踏み出している(清水2015b)
- 自らが経験したことを社会化しながら、地元への貢献をしようとしている(清水、森田2017)
- 自分のことを考えていいと思えるようになったきっかけは、学習支援の場でつながった様々な人とその人を通じた挑戦をする機会があったことであった(清水2020)

(2) 継続的な支援と研究の必要性

東日本大震災における子ども支援に関する先行研究は、乳幼児、小学生に焦点を当てたものや(例:遠藤2015、西山2014、山本2013)、年齢を特に問わないもの(例:竹中2012)、障がい、虐待、遺児・孤児への関心と蓄積、既存の支援機関を通じた現状把握を試みているもの(例:宮島

2011、鈴木2013、三上2015)が多く散見される。中高生を対象としたものの少なさに加え、市民社会の果たした役割を言語化したものはない。筆者らの研究において、市民社会の取り組みの意義を確認することができた。しかし、長期的な支援の視点について提起している研究は見当たらない。

(3) 研究の目的

筆者らは今日に至るまで、被災経験がある子ども・若者たちと一緒に、今後起こる可能性がある大災害時における子ども・若者支援のあり方について検討をしてきた。当該研究は現在も継続している¹。被災時小学校高学年から中学生だった彼らは、ほとんど地域で公的な支援が利用できない中、学習支援の場とそれをきっかけとした様々な人々とのつながりの中で自身の想いを表現しながら育ってきた。

本研究では、議論が始まっている東日本大震災で被災した子ども・若者への長期的支援について、子ども・若者たちと彼らを支えてきた筆者らの取り組みを手がかりとしながら、必要とされる支援の視点を仮説的に示すことを目的とする。筆者らがこれまで調査研究を一緒に展開してきた子ども・若者たちの語りから、長期的に彼らと向き合っていくことから見いだされる、震災の経験を自分ごととしつつ、あのときと今とこれからを共有し続けることの重要性を描き出す。

2.研究の方法

まず調査対象となった若者たちの概要と筆者との関係について述べていく。

(1) 研究対象者の概要

調査の対象としたのは、東北沿岸部で東日本大震災を中学校2年生3月に経験した若者1人(男性)である。Aは現在Z市において社会人として活躍している。現在24歳である。Aとは、2013年度より筆者らと一緒に東日本大震災における子ども・若者支援に関する調査研究²を行ってきた。初めて出会ったときは高校2年生であった。この間、東京や東北において同世代やおとなたちと一緒に震災後の子ども・若者支援に関する意見交換会や、地元の同世代の子ども・若者たちに対する調査研究を一緒に実施してきた³。今日においても筆者らの調査研究等へ参画をしている。2019年4月より、地元で事業を立ち上げつつ、語り部や若者向けの被災地ツアーを企画・運営をしている。

(2) 研究の方法

1) 支柱となる研究理論

本研究では支柱となる研究理論を当事者参加型リサーチとフェミニストリサーチに求めた。当事者参加型リサーチについて山崎(2002:25)は「当事者の〈願い〉や〈目標〉を研究者が共有することによって、その実現に役立つ調査研究の可能性が広がる。また、当事者が参画を通してその主体化・学習・成長を促す〈エンパワメント〉が期待できる」としている。フェミニストリサーチの特徴について、杉本(1997:9)は「①女性に関することを、(多くの場合)女性の手によって、そして女性の利益のために行う調査のこと。②それは女性の状況を変えることに貢献するものでなければならない。そのため、調査方法論が多様であったとしても、③調査研究者が、自らをフェミニストであるという認識のもとに行う調査であることが基本とされる。」という。

子ども・若者たちは語ることを通じて新しい発見や価値にふれる機会を得ることがある。それは瞬時の場合もあれば、時間の経過とともに見えてくることもある。彼らに寄り添うおとなの責任なり役割として、継続的に寄り添いながら一緒に考えることが求められる。そのため、彼らに対する

¹ 現在は東洋大学福祉社会開発研究センターSWユニット(子ども)において研究を継続させている。

² この調査については、東洋大学福祉社会開発研究センターにおいて研究倫理審査を受け実施している。研究代表者は森田明美(東洋大学社会学部教授)

³ その成果の一部は東洋大学福祉社会開発研究センター(2018)に掲載

調査研究は一方的なものであってはならない。永野（2020:12）は「聴衆の期待に応えようと自分の経験を詳細に話し過ぎてしまったり、十分に扱うことのできないトラウマについて話すことでしんどさを抱えたり、大人たちに語ることを半ば強制されて傷ついていく当事者の仲間たちを多く見てきた。」と述べているが、子ども・若者たちがこれまでのことを語ることに對して、研究者は本当に彼らの権利を擁護できているのか、一切の手を抜かず真摯に向き合わなければならない。東日本大震災に絡めて言えば、震災後子どもたちが描いた絵がメディア等で多く取り上げられ、子どもたちの悲しみや傷に注目が集まったことがある。子ども自身が想いを描くことと、それが第三者に多様な形で見られ評価されることは、子どもたちのそのときの想いと、成長過程の中で変化する考え方・捉え方を十分に踏まえた上でのことだったのであろうか。おとなが一方的に子どもたちが表現した瞬時のことを劇場的に取り上げていたと考えられる。

研究者自身が明らかにしたいことと、彼らの知りたいこと、なかなか表現できない言葉を一緒に探すことなど、研究に参画することが彼らの力になっていくことが重要であり、一緒に作り上げていく姿勢が求められる。これは、研究倫理審査を通過し、子ども・若者との承諾書等やり取りを持つてのみなし得ることではない。

また、筆者自身は東日本大震災当時北海道にいたため、津波や原発と言った直接的な被害を受けることはなかったが、筆者の親の実家が東北であり、自身のアイデンティティは東北にある。研究者としても実践者としても震災から学ばなければならないことがたくさんあると考え、研究活動に従事してきた。筆者とAは初めて出会った頃より、今後も起きるであろう自然災害に對し、東日本大震災の教訓をどのように大切な人たちに届けることができるかを一緒に考えてきた。彼ら自身が筆者らとの関わりをどのように評価しているかははっきりとは語られないものの、この8年近く未だに一緒に議論や研究を展開することができていることから、一方的なアプローチによる研究ではないと筆者は捉えている。

一方で、これまでのAと筆者の関係性や依拠する研究理論を示せば、このような研究の進め方では普遍性が問えず、学術的なニーズを十分に満たすことができないという反論があるかもしれない。しかし、改めて問うべきは、子どもの権利を十分に踏まえた研究枠組みなのかということである。子どもの権利条約の一般原則にある安全性と成長発達、差別されることがないこと、そして彼ら自身の参画が十分に配慮されていない研究による成果は、最善の利益を実現することが困難であるばかりか、先行研究として取り上げてしまえば研究に協力をした子ども・若者たちの権利を侵害することもあり得る。彼らの権利がきちんと擁護された研究デザインが必要であると考え議論を試みている。

2) 調査実施概要

調査は2019（令和元）年11月にAの地元であるZ市にあるカフェにおいて実施した。

3) データ収集方法

おおよそ90分程度半構造化面接法によるヒアリング調査を実施した。ヒアリング項目は震災以降の様々な人たちとの交流・意見交換に対する自身の意義や想い、現在の仕事のことや今後のことなどを設定した。また、了解を得たのちICレコーダーでの録音を行った。

(3) 分析方法

調査対象となった若者の語りを逐語録としてテキスト化し、分析を行った。東日本大震災発災時、高校進学時、大学進学時、そして現在と時期を区分しつつ、彼の目に東日本大震災や地元、そして利用してきた支援がどのように映っていたのか、そして経験を語り続けてきたことへの想いについて分析をする。なお、実際のヒアリング調査は時間軸を行ったり来たりしているが、分析では

時間軸に沿ってテキストを配置し、順を追って彼の語りが把握できるようにしている。なお、記述の仕方については岸（2010）を参考にしている。

3.倫理的配慮

本研究は「日本社会福祉学会倫理綱領にもとづく研究指針」を厳守して実施した。具体的には、ヒアリングを行うにあたり、若者たちに本研究の目的と調査内容、データの取扱いなど倫理的配慮について書面および口頭にて説明し、同意を得て行った。また、本研究は和洋女子大学倫理審査委員会「人を対象とする研究審査」において承認を得て実施している（承認番号：1911）。

4.調査結果

(1) 震災当初

-避難所では小さい子どもたちと比べたら全然気にかけてもらう機会はなかったんじゃない？

いや、結構忙しかったです。支援物資を分配するのに手伝ってくれて言われたりすることが結構あったんです。あと、小さい子どもの遊び相手もしてましたね。

-そうだったんだ。手伝って言われて手伝っているときに、当時は受験が控えてたじゃない。そんな不安なんかは聞いてもらってたの？

あんまりそんなことはなかったと思いますよ。避難所の手伝いが結構忙しくって、自分のことを考える時間なんて全然取れなかったんだと。

-P（筆者注：学習支援事業を展開していた首都圏のNPO）の学習支援はどうやって利用に結びついたの？

バスを待っている間利用してました。だからほとんどクラス全員。学校の延長線みたいだったけど、でも楽しい時間でしたよ。

-学校からPを紹介してもらったの？

多分学校からだったと思いますよ。ちょっと覚えてないけど。みんなバス待ちだったからほぼ強制的にPに行っていました。

-強制的な感じだったの？

いえいえ、全然。だいたい30分ぐらい勉強して、あとは大学生と話して。Fさん（筆者注：学習支援の場の現地の責任者）から将来のことをどうやって考えたら良いのか一緒に話したりもしてましたし、楽しかったです。

-意見交換会は高校に進学してからだけど、進学したあともFさんとはつながりがあったの？

LINEでつながってたんだと思います。意見交換会もFさんが声をかけてくれて、行ってみないって？東京に行けるからありがたかったです。

(2) 高校進学後

-高校生の時って地元なんだっけ？

地元じゃないですね。地元のとなりのX市のX高校です。仮設（筆者注仮設住宅）に住んで、そこから高校に行っていました。

-高校では震災の話ってする機会あったの

X市って内陸だから津波のことって経験していないんですよ。そうになると、学校の中でも震災の話ってそんなのたくさんすることもないし、僕の方から震災の話をするればきっと気を使われちゃう。そんなことも実際ありましたし。だからCとDとは時々地元のことを話したりしてたけど、それぐらい。家族とも地元のことを話した記憶があんまりないです。

-大学進学はどうやって考えていったんだっけ。

たくさんの人たちに助けてもらって、でも助けてもらうだけじゃだめだし、知らないうちにまちが復興して行って、僕たちが望んだまちの姿じゃなくなってきて、ちゃんと子どもであっても声をあげないとならないって思っていましたね。

-高校生になってそう思ったの？

多分、中学生のときからですね。何かしなきゃって思ってたとは思いますが、それなりに具体的に考えるようになったのが高校生のときです。意見交換会や、語り部で話をさせてもらって、結構頭の中が整理できたりすることってあったんですよ。あ、でも中学校卒業の直前に中越地震の被災地へ行って地元の人とお話する機会があったんですよ。

-それはAくんの中学校の企画か何か？

震災がきっかけで向こう（筆者注：中越地震の被災地域）地元との関わりができたんだと思います。あのときは復興に対して結構ネガティブな思いでいて、でもそれって何て言ったら良いかわからない時期だったんですよ。でも、あっちに行って「復興してほしい」って言っている人の話を聞いて衝撃でしたね。そう言っちゃうんだ。

-どう驚いたの？

友だちとかの人とのつながりは復興できないじゃないですか。でもまちなみは結構変わってきてしまって、それがとっても違和感だったんですよ。勝手に復興が進んじちゃっているって。

-意見交換会のような語る機会がどう自分のそのときや将来設計に影響していたと思う？

あんなにたくさんのおとなの人たちに話を聞いてもらえると思わなかったし、とても嬉しかったし、想ってることって話して良いんだって思いましたね。

(3) 大学進学時

-前から大学に進学したときの衝撃はいろんなところで話してくれていたけど、再度そのときのことを話してもらっていい？

いいですよ。大学に行って、同世代が全然東日本大震災のことを知らないことは驚きましたね。あれだけ報道されていたし、Z町って言葉もたくさん出ていたのに。意図せずとも震災の話題というのは初めて会う同級生の友人たちの間で震災の話が浮かんできたのですが、全然関心も湧かないような知らない人もいれば、聞いてくれる人もいました。

B（筆者注 Aと親しかった友人、3人のうちのひとり）も？ってやりとりをLINEでやっているうちに、他の2人からもおんなじようなことがあったって言って、すぐに頻りに連絡をするようになっていきましたね。一人は「許せない」って言ってましたし。

-自分自身の中でも風化していくことに対して当時は何か感じていることってあったの？

思い出す思い出さないとかじゃなくて、意見交換会やY先生（筆者注：筆者と共同研究をしてきた研究者）や先生（筆者注：筆者）と話をする機会ってどんどん減ってきてしまって。それと、一緒に作ってくれていた国会の意見交換会だって、気がついたら部屋の規模小さくなってますよね。時間が経つと風化してきているって本当に感じます。

-同世代を地元へ招くツアーは大学1年生の時点で始めているんだよね？どんな思いから取り組みだしたの？

やっぱり、震災を経験して自分でも何かできないかって。支援を受けるだけじゃなくて、僕たちも何か担いたいって考えていたことが一番大きいです。それと、同世代の子たちにこそ震災のことを知ってもらいたいって思いがとっても強かったですね。

-ツアーを実施していく上で苦慮したことを挙げてもらっていい？

費用については、招くのだから自分たちで用意して、役場とかにこんなツアーをやりたいんだけど、場所や何か支援をしてもらえないかって相談しに行ったんだけど、話を聞いてもらうことがほとんどできなかったです。その後、復興に関する応募の企画が町からあって、それに応募したんですけどだめでしたね。

-それはY先生からのアドバイスがあったやつだよ。役場では取り合ってくれなかったの？そもそもどの担当課だったんだっけ？

どうだったかなあ、Y先生にアドバイスをもらって、役場に行ったんですけど、最初どこに行けばいいかわかんなかったし、今もそうですけど、あんまり役場って行ったことがないというか、頼ることはないですからね。

-そっか、高校生とか大学生のときに役場に行くってことないもんね。大学生のときは首都圏に出てたからなおさらか。

そうですね。

(4) 地元に戻ってから

-地元に戻ってこれまでの震災復興の取り組みだとか、一緒にやってきた調査のことって家族とかお友だちに話したりするの？

全然ないです。多分、地元にもどってきて先生がはじめてなんじゃないですか。本当にくるんだって思いましたもん。でも、楽しみでしたよ。

今ツアーの計画をBたちと考え始めてるんですけど、みんな仕事も始めてるし、両立していくのはかなり大変。仲間がいるからモチベーションが維持できるけど、気にかけてくれる人って言うんですかね、みんな（筆者注：ツアーを一緒に企画運営している友人たち）や先生たちがいるからってことありますよ。

-これまでいろんな機会に自分のことや震災のこと話してきたじゃないですか。全国どころか世界に向けて。でも、地元ではそういった機会がなかったってことだよ。地元とのつながりだけはどうも作れてなかったってことなのかな？

地元には今は住んでるので、つながりが無いとは思わないですけど。でも、ツアーや震災のことで地元何か一緒ってことはどうなんだろう。

-地元と馴染めないってことではなくって？

いやー、馴染む馴染まないかなあ。最近ですよ、こんな地元でも好きになってきたのは。中学生や高校生の時は勝手に復興して行って納得できなかったですからね。人のつながりの復興はできないってよく言ってきたんですけど、そんな不満みたいなことって結構長く思っていましたし。

-こうやってこれまでのことを聞かれて話をしていくってことはAくんにとってどんな意味だったか位置付けになったりしているのかな？時間も拘束されるじゃない。他にやることのあるのってことだってあると思うんだけど。

（筆者に）お世話になってますからね。でも、時々こうやって話をする機会があると、わかんなかったこともわかってくることってあるんだと思ってますよ。きっと震災がなかったら、こうやって考える機会だってなかったんじゃないですかね。

-震災があって得られたことがたくさんあるってこと？

そうですね。あってよかったと言うんじゃないですけど、こんなに自分のことや地元のことを考えながら生活していくって（震災前は）全然考えられなかったです。震災がなかったら先生たちにも会えなかっただろうし、郷土芸能を披露するために日本全国・世界に行くこともなかった。それができてよかったってことじゃなくて、いろんな人たちと出会えたことに感謝してます。震災がなかったら何してるんでしょうね？なんか流れにのって大学に行くことなく、いつの間にか何か就職しているみたいな感じだと思います。

-こっちに戻ってきて、意見交換会の形が少し変わって、V市（筆者注：東北の自治体）で開催するようになったでしょ。こないだの8月（筆者注：2019年8月末の催し）のやつ。なかなか忙しくて時間が取れなかったと思うけど、感想とか教えてもらっていい？

ほとんど先生たちに企画を立ててもらったんでありがたかったですし、地元に近いところで僕より若い大学生と交流することってなかったから、面白かったですね。あのときは人

生曲線をBが使ってワークショップをやったんですけど、いい手応えがあったし、工夫してみたいですね。

—自分の経験を若い人たちに話すときって、これまでのおとなたちと対象が違うじゃないですか。不安だったり、何か怖かったりすることはあるのかな？

うーん、確かに津波で人が流れていく姿を見てきたし、津波に飲まれた人を救出したけどその後亡くなったっていう場面はありました。だから、本当はとってもショックだったりトラウマだったりがあるんでしょうけど、僕たちは多分一緒にいたから。それこそBとなんて保育園のときから一緒ですしね。仲間がいたっていうことが大事でしたね。僕は発信していきたい気持ちが強く、外で語れる場もあり、支えてくれる大人たちがいました。いづれにせよ一歩踏み出してみると見える景色が変わった気がし、語ったことによって自分が自分の考えていること、思っていることをとても整理できたということがあったので、すごく視野が広がりました。食わず嫌いと一緒に食べてみたら意外とおいしかったみたいな、なんとなくでも一歩踏み出せるという環境のおかげで、若者ながらに多様な考えを交えて話すことができ、とても良い経験ができたと思います。

—Aくん、これまでいろんな支援を利用してきただしょ？さっきの風化の話とも重なるんだけど、支援が少なくなっていくことってどう見えているの？

風化はしますよね。仕方ないんじゃないですか。Pの学習支援って大学生が来てくれていたけど、自分も社会人になったし、どんどん暮らしが変わっていくし。地元で大学生に会うことって震災前ではきっとほとんどなかったんだと思うんですよ。だから、大学生になることもイメージできたんだろうし、感謝ですよ。震災がなかったらどんな今なのかって時々思うことがありますし。

5.考察

わずか一人の語りから一般的なことを断言することはできない。しかし、支援の視点を提起するための仮説を生成することはできる。そのため、彼の語りのポイントをまず整理する。彼が利用してきた支援の構造・関係性、支援の機能、意義についてである。そして、長期的な支援の視点について仮説的に提起する。

(1) 「孤立」の外側に「つながり」の場がある

Aは震災当初、中学校2年生から3年生を迎える時期にいた。避難所では小さい子どもたちの対応を任せられたり支援物資の搬入や分別したりしながら過ごしていた。また、避難所自体に人が多かったことから、常に彼の側には誰かしろのおとながいたと言える。しかし、震災のことそれ自体を家族や近隣の人々、友達と話をすることはあまりなかった。学校も家族も被災者であり、じっくりと話をしたり、今とこれからの不安等想いを言葉にしたり吐露したりする機会はなかった。学校再開後も、Aは親しい3人の友だち以外と震災について語ることはほとんどなく、自身の想いを丁寧に聞いてもらう機会がなかった。丁寧に聞いてもらうことができなかった状況のことをここでは「孤立」という言葉で表現したい。

学校が再開してもなく、学校の一室を使った学習支援の場が運営されることとなる。首都圏のNPOが実施しているものであった。仮設住宅が離れていたことから、学校から自宅まではバスに乗って帰らなければならず、そのバスが来るまでの間、Aは学習支援の場を利用していた。家族や学校以外のおとなに、震災のことやこれからの漠然とした不安について話をすることがあったことが、その後の進路選択などに影響を及ぼしている。学習支援の場のようないわゆる子どもの居場所において、話を丁寧に聞いてもらった状況を「つながり」と表現したい。

高校、そして大学に進学し、彼の周りにいた同世代の友人たちとは震災に関する話をすることがほとんどなかった。身近な人たちと震災のことを一緒に考える機会が得られない中で、彼は震災に関する取り組みをイメージするようになる。高校卒業後の進路決定については、高校で獲得したと

いうより、中学生時代に利用していた学習支援の場からつながった意見交換会等、東北ではない地域のおとなたちや若者たちと関わる中で作り上げてきたと言える。彼にとって、つながりは地元で暮らす人々ではないところで得られてきたのである。

ここまでをまとめると、その後ツアーと一緒に企画・運営する仲間との関係を除き、身近な人々との関係は孤立した状況にあり、つながりは身近な人々の外側にあったとすることができる。

(2) つながりの場で新しい経験を得る

つながりの場で自身の想いを言語化することを通じて、A自身が今とこれからの自分を考えるための言葉を獲得してきたと言える。A自身は考えを整理する機会が得られたと言うが、中学生から大学生、そして社会人となった現在に至るまで、様々な人々とその人々が語る言葉に出会ってきた。中学生、高校生時代はおとなに比べれば、十分に自身を表現する言葉を理解しているとも限らない。中越地震を経験した人たちとの交流において「復興してほしい」という言葉に出会ったとき、地元の復興が自分の窺い知らないところで進んできたことへの違和感が表現できるようになったことが例として挙げられる。あるいは、被災地域において、若者向けの震災に関するセミナーのスピーチをする機会を得ている。Aより少し若い世代に対して何を伝えることができるのかという挑戦をする機会を得ていた。

それまで得られなかった機会に触れることができた。つながりの場において新たな経験を得ていたと言えることができる。

(3) 肯定できる経験を共有できる存在

分析のテキストだけでは十分に伝わらないかもしれないが、調査自体の雰囲気は終始和やかであった。和やかという以上に、昔話で盛り上がっている雰囲気であったとも言える。Aが地元に戻って半年ぐらいが過ぎたときに筆者は訪問をしている。Aは地元でこれまで一緒に活動してきた人と話をする機会はなかった。そして、筆者と一緒に話していたことの多くは、つながりの場で経験してきたことである。この話は、地元ではほとんどすることができない。先述したように、今日に至るまで震災に関わる話題を身近な関係の人たちと交わすことがなかったためである。

彼にとってつながりの場で出会ってきた人々の、誰が専門家で誰がそうでないのかはそれほど重要ではないのかもしれない。様々な立場のおとなたちが彼らの想いや声にしっかりと耳を傾け、一緒に彼らと考えてきたことが大切であった。Aはそうした出会いをかけがいのない経験として、今も大切にしている。

市民社会による支援は残念ながら、支援者自身の暮らしやライフステージの変化、団体の運営等を考えれば、恒常的に展開できる体力を必ずしも持っているわけではない⁴。彼の語りにもあるように、支援者もまた大学生等若者たちであり、支援の場に携わったことが次の人生のステップへとつながり、被災地から離れていった。市民社会による支援が少なくなっていくことは、避けられないことであるとA自身も認識している。

かけがいのない経験を今も大切にできるのは、それでも彼を気にかける存在がいるということが大きく影響していると考えられる。

(4) 長期的支援の仮説的視点

東日本大震災後に展開された児童福祉の支援は、平時の枠組みの中で展開されてきたことをすでに指摘した。それ自体は重要であり、児童福祉の固有の取り組みであるといえる。Aが利用してきた学習支援の場や意見交換会は、児童福祉の枠組みにおいて捉えられるかどうか、本稿では十分に

⁴ NPO等の震災以降の継続的な支援は運営上の課題が十分に解決でなかったことや、例えば5年といった一定の区切りをつけて被災地から撤退したりしている。

判断することできない。近年、子どもの貧困対策の一環で学習支援が社会福祉領域において議論されているが、社会教育の観点からも議論が可能であろう。意見交換会に関して言えば社会教育の方が相性が良いかもしれない。児童福祉か社会教育かの論点ではなく、地域で暮らす子ども・若者たちが利用することができる社会資源を作り出したり、運営のサポートをしたりするなど地域福祉の議論を児童福祉において位置づける試みが求められるのではないかと考えられる。児童福祉と社会教育それぞれの固有の役割と、両者をつなぎつつ子ども・若者たちが暮らす地域を作り出し、それぞれを運用させていくということである。古川（2009：61）が示していたL字型構造に近い提案である。その際、継続的にきちんと子ども・若者たちの声に耳を傾け、支援システムを構築していくことが求められる。Aは、震災から今日まで様々な機会を通して自分の想いを言葉にしてきた。伝える練習なり訓練をしてきたというよりも、きちんと話を聴くことができるおとなたちとの接点があったことが重要であった。彼もまた、地域やまちにおける復興の担い手である。そうした子ども・若者たちの参加・参画を基盤として支援を作り出すことが、肯定的な経験へとつながり、長期的な支援へを作り出せるのではないだろうか。

(6) 今後の課題

- 依拠する研究理論についての論考を深める
- 今回は一人の語りを手がかりとしたが、すでに他3名の調査も実施済みであり、本稿と合わせて再度分析を行う
- 調査結果の記述と分析の仕方について、再度検討が必要

<参考文献>

- 柴田理瑛他（2019）「東日本大震災の長期的影響と今求められる支援者支援：一般社団法人東日本大震災子ども・若者支援センター2018年度活動報告」『宮城学院女子大学発達科学研究』（19）8-16.
- 足立智昭（2019）「第18回 東日本大震災子ども支援意見交換会 発表資料」より
- 門間一也（2013）「大震災からの復興における子どもの居場所・まちづくりと子ども参加」『地方自治と子ども施策 全国自治体シンポジウム2012』34-8.
- 武田信子（2015）「第7章 思春期」山野則子、武田信子『子ども家庭福祉の世界』有斐閣アルマ.139-51.
- 森田明美（2012）「東日本大震災における子ども支援」公益財団法人生活総合研究所『生活協同組合研究』435,32-40.
- 遠藤明子（2015）「原発被災地における子どもの屋外活動制限・自粛の現状」『福島大学経済学会』83（4）221-31.
- 西山久子ら（2014）「震災後2年間の活動報告：学校心理士による子どもと学校への支援」『日本学校心理士会年報』6，115-128.
- 竹中晃二（2012）「被災地の子どもを対象としたストレスマネジメント教育および予防行動キャンペーン」『人間科学研究』25（2），259-64.
- 東洋大学福祉社会開発研究センター（2015）『平成26年度 厚生労働省児童福祉問題調査 課題1 「被災した子ども家庭を支援するためのシステム開発調査研究事業」報告書』
- -（2016）『平成27年度 厚生労働省 子ども・子育て支援推進調査研究事業 課題12 「被災した子どもと家庭を継続的に支援するための当事者参加型システム開発調査研究事業」報告書』
- -（2018）『震災後の子ども・若者たち 継続的支援が育てた力』
- 清水冬樹（2015a）「被災地で学習支援を利用する中高生支援に関する研究（その2）ーグループインタビューの再分析ー」第63回日本社会福祉学会 秋季大会 報告資料
- -（2020）「子どもの権利を基盤とした児童福祉における市民の位置づけ」『2019年度一般社団法人日本社会福祉学会関東地域ブロック研究大会抄録集』9-10.
- -（2015b）「東日本大震災からの子どもたちの復興「学習支援の場で育つ子ども調査」からの報告 パートII 子どもへの調査結果報告」報告資料
- 清水冬樹、森田明美（2017）「子どもたちが生きる希望をつかむ子どもソーシャルワーク 東日本大震災で被災した子どもたちが利用していた学習支援の場を手がかりとして」『ソーシャルワーク研究』42（4）,相川書房,32-9.
- 山崎喜比古（2002）「当事者参加型リサーチと研究者」『HIV感染被害者の生存・生活・人生 当事者参加型リサーチから』有信堂、22-25.
- 杉本貴代栄（1997）「第1章 日米の「女性世帯」研究の視点」中田照子、杉本貴代栄、森田明美『日米のシングルマザーたち』ミネルヴァ書房、2-12.
- 永野咲（2019）「日本における当事者参画の現状と課題」『子ども虐待とネグレクト』21（1）、8-14.
- 鈴木康裕（2013）『復興支援が問いかける子どものしあわせ 地域の再生と学校ソーシャルワーク』ミネルヴァ書房
- 宮島清（2011）「震災孤児のニーズから省察する社会的養護のあり方」『教育と医学』59(11)40-6.
- 三上邦彦（2015）「東日本大震災津波における社会福祉実践の役割と課題-岩手県内における子ども家庭福祉の領域を中心に-」藤野好美他『3.11東日本大震災と「災害弱者」 避難とケアの経験を共有するために』生活書院,128-161.
- 古川孝順（2009）『社会福祉の拡大と限定』中央法規出版

本研究は、平成26年度 厚生労働省児童福祉問題調査研究事業課題1「被災した子ども家庭を支援するためのシステム開発調査研究事業」、平成27年度 厚生労働省子ども・子育て支援推進調査研究

事業課題12「東日本大震災による被災児童等に対する支援に関する研究」、平成27年度 三菱財団社会福祉事業・研究助成「東日本大震災において支援を受けてきた中高生の参加型子ども支援マニュアルの開発」、JSPS科研費19K02179の助成を受けて実施しているものです。